

の実在を固執した結果、龍樹をして戲論生成の根源を追及する四不生論を説かしめた有自性論者の対破のために八不が説かれ、しかも、その八不の増加を述べているのである。事実、大智度論には、不増・不減、不垢・不淨が加わり、合計十二不^⑤が説かれている。

要するに、八不中道の「八不」あるいは、八不の縁起の「八不」は、あまねく概念の否定、すなわち一切のことばの絶対的否定 *Prasajya pratisedha* であり、その思想的根拠は縁起にあることは言うまでもない。

そして、不滅・不生が八不の筆頭を占める所以については、青目が次のように説いている。

生相決定不可得故不生。不滅者。若無生何得有滅。以無生無滅故。余六事亦無。

ところで、龍樹は、縁起無自性空説、すなわち相依相待の縁起説を中軸として、不滅・不生をはじめとする破邪即顯正の論理を展開するのであるが、より明確に、それらの本質的な意味を把握しておくために、かれの中觀思想の直接の源泉である「八千頌般若経」の譬喩をたずねておこう。

善男子よ、例えば、絃楽器の音は生じつつあるからと言え、音はどこから来るでもないし、消えつつあるからと言え、(その音は)どこかへ行くのでもなく、どこかへ移るわけでもなく、因や縁の和合 *samagri* に依存しているのである。……すなわち、器体を縁とし、絃を縁とし、棹を縁とし、柱を縁とし、皮を縁とし、撥を縁とし、人の加えるにふさわしい努力を縁とし、このように因に依存し、縁に依存したもとして弦楽器の音はあらわれるものである。しかし、(その音は)器体から生ずるのでもなく、皮、弦、棹、柱、撥からでもなく、人の加えるにふさわしい努力から音は発生するのでもなく、実に、それらのすべてのものの和合 *samāyoga* によって施設される。消えつつある音も、どこかへ去るのではない。

この経文に説かれているのは、まさしく、縁起の道理にはかならない。すなわち因と縁とが熟せば、たちまちここに生じ、因と縁とが散ずれば、たちまちにして滅するという縁起の道理を説くものである。この縁起の道理によって、弦や器体や撥や演奏者の努力などを因縁とする弦楽器の音が、自体 *svānman* として、生滅、来去したものでないことは明白である。

この論証によって、自体もしくは自性は、幻のごとき、あるいは麁気楼のごときものであり、このことによって、「常一主宰」なる *svabhāva* の存在が謬見として否定されるのである。従って、滅生、断常、一異、来去という四種相对概念を前述の「八千頌般若経」における弦楽器の音の生滅する因縁にそのまま配当すれば、自ら、縁起

なるが故に無自性、無自性なるが故に空、という中觀思想の本質的な意味を誤りなく探り当てることができよう。

とにかく、八不は、一切のことば、すなわち言辭立語を否定するものであり、だからこそ、次に掲げる二頌は、中論の真髓を語る詩頌と断定しうるのである。

業と煩惱が滅尽するから解脱があり、業と煩惱とは分別 *vikalpa* から起る。また、これらの分別は戲論 *prapañca* から起る。しかし、戲論は空において滅びる。(第五偈)

心の対境が滅するから、ことばの対象もなくなる。なんととなれば、法性は不生不滅であり、涅槃のごとくであるから。(第七偈)

註① 吉蔵撰「三論玄義」(大正四五・一a)

② P. L. Vaidya, ed., *Aṣṭasāhikā Prajñāpāramitā*, *Buddhist Sanskrit Text* No. 4, Darbhanga, 1960, p. 235

③ L. de la Vallée Poussin, ed., *Prasannapadā nāma Mūlamadhyamakavṛtti*, p. 11

④ 青目釈・鳩摩羅什訳「中論」観因縁品第一(大正三〇・一c)

⑤ 「大智度論」卷八十九(大正二五・六八九a~b)

⑥ 青目釈「中論」観因縁品第一(大正三〇・一c)

⑦ *Aṣṭasāhikā Prajñāpāramitā*, p. 254, ll. 17~26

観音信仰を中心とする教団群について

— その現況と特色 —

妹尾 匡海

筆者の当面の研究テーマは、現代における観音信仰の状況についての考察というものであるが、このテーマにもとづいて、観音信仰を中心とする教団群の現況と特色を明らかにしておきたいと思う。

日本における仏教系教団は約二百あるといわれているが、その正確な数は把握されていないのが実状である。これは宗教団体の法人届けが、文部大臣届け(文部大臣認証)のものと、各都道府県の知事届け(知事認証)のものとの二種類があることに、その大きな原因があるといつてよいと思われる。すなわち、文部大臣認証の宗教法人は、文化庁の宗教統計などで詳細なデータが発表されているが、各都道府県の知事認

証の宗教法人は、全国の都道府県庁に直接おもむいて調査しなければ正確なデータを得ることができないのである。言いかえれば、たとえその教団の勢力が大規模なものであっても、知事認証の法人であった場合は全国的に知られることが少なく、情報が得られにくいということがいえるのであり、逆に、比較的小規模の教団であってもそれが文部大臣認証の法人であった場合は宗教統計などで詳細なデータが発表され、それにもなつて知名度も高く、マスコミにもとりあげられやすいといったことがいえるのである。

このことについてひとつの例をあげれば、青森県に「松緑神道大和山」と称する神道系教団がある。この教団は明治時代に立教し、現在、信徒三十万人を有しているが、青森県知事認証の宗教法人であるために文化庁発行の『宗教年鑑』等にも詳しく記載されることがなく、同じ神道系の「大本」(信徒約五十万)、「ほんみち」(信徒約三十万)等とはほぼ同規模の勢力を有しながら全国的な知名度は比較にならぬほど低く、そのため調査研究の場合もその存在がしばしば見落とされがちである。

観音信仰を中心とする教団群について調査する場合も、このように、文部大臣認証のものとはかくとして、各都道府県知事認証の宗教法人の調査は制約が多く、相当地な規模を有している教団であってもその存在を見落とされている可能性が充分にあると思われる。その意味において、この小論は調査の現段階におけるまともなことにすぎぬことをあらかじめ断っておきたいと思う。

さて今回、『宗教年鑑』等を参照し、またわかる範囲内で実際に調査した結果、得られたのが次の表である。

既成教団群	新教団群(新宗教)
救世観音宗	真如苑
観音宗	阿含宗 観音慈恵会
粉河観音宗	平和観音妙庵
聖観音宗	観音聖教
	世界救世教(附)

この表では既成教団と新教団とを分けてあるが、これは、観音信仰を中心とする教団の特色について考察する場合、まずそれらの教団を既成教団と新教団とに分けてそれぞれの実態を把握し、その差異や共通の特色を明らかにすることが重要であると思われたからである。

この、既成教団と新教団との区分の基準については、学問的定説のないのが現状である。しかし、最近では明治二十五年以降に立教、創立された教団を新宗教とする説がやや主流化しつつあるようである。この小論では、この問題について多くを論じることが許されないが、一応、筆者もこの主流化しつつある説に従って既成教団と新教団とを分類した。

さて、既成教団群には表に見られるように「救世観音宗」「観音宗」「粉河観音宗」「聖観音宗」の四つが存在しているが、まず、「救世観音宗」は西国三十三カ所のうちの二番にあたる紀三井寺の観音信仰を中心とする教団である。本尊は十一面観音で、教勢は寺院十五、教会一、教師二十五人、信徒一万人と公称されている。紀三井寺の観音信仰は、宝亀元年(七七〇年)にまでさかのぼるといわれるが、教団としては、昭和二十三年、真言宗山階派から分離独立して宗教法人を設立している。『観音経』に説かれる現当二世の幸福祈願を宗義としているが、やはり伝統的な巡礼地信仰に支えられている教団といつてよいであろう。

次に「観音宗」は吾彦山大聖観音寺の観音信仰を中心とする教団で、本尊の聖観音は俗に我孫子観音と呼ばれて庶民の信仰を集めている。教勢は寺院二、教師三十五人、信徒五十万人と公称され、弘誓自他平等、福寿無量を宗義としている。この教団も前出の「救世観音宗」と同じように昭和二十一年に真言宗山階派から分離独立して宗教法人を設立した。教団の特色はやはり伝統的な巡礼地信仰に支えられている点にあるといつてよいであろう。

次に「粉河観音宗」であるが、この教団は西国三十三カ所のうちの三番にあたる粉河寺が本山であり、千手千眼観音が本尊である。この「粉河観音宗」は、粉河寺を中心として昭和二十三年に天台宗より分離独立して宗教法人を設立した。教勢は寺院六、信徒二万五千人を公称しているが、粉河寺を中心とする巡礼地信仰がその根本となっていることは前出の二教団と同様であるといつてよいであろう。

次に「聖観音宗」は、天台宗浅草寺を本山として昭和二十五年に別立された。本山の浅草寺は聖観音を本尊とし、「浅草の観音様」として庶民の信仰を集めている。この「聖観音宗」は浅草寺の観音信仰を中心としながらも、伝統的な巡礼地信仰から新しい布教活動を中心とした宗教への脱皮を計って別立されたものといわれ、そうした点から注目されよう。

以上、これらの観音信仰を中心とする既成教団を見ると、すべて戦後独立したものであり、それ以前はすべて真言宗と天台宗に属していたものであることがわかる。またこれらの本山はいずれも庶民の信仰を集めた伝統的な巡礼地信仰のメッカであり、分離独立後もそのカラーは変っていないといえよう。必然的に教団としての活動は不

活発であり、旧態然とした巡礼地信仰以外に大きな特色を見出すことができないのが現状である。ただ、そうした中で「聖観音宗」は唯一、布教活動や社会福祉活動が極めて顕著であり、たんなる巡礼地信仰からの脱皮が計られていることが認められよう。

さて、次に新教団群について見てみたい。まず、東京都立川市の真澄寺に本部を置く「真如苑」は、十一面観音、釈迦牟尼仏、不動明王を本尊とする真言系の教団であり、醍醐寺派の真言密教をその母胎としている。教勢は教会十三、教師二千五百人、信徒五十万人と公称され、最近では海外への進出も盛んであるといわれる。

次に「阿含宗観音慈恵会」は、京都の花山に本部を置く密教系の教団である。本尊は準胝観音、大日如来、釈迦牟尼仏で、教勢は教会六、支部三、教師三十五人、信徒五万人と公称されている。

次に「平和観音妙庵」は、本部を金沢市に置き、十一面観音を本尊とする教団である。教勢は、教師十人、信徒千人と公称されている。次に、岡山県に本部を置く「観音聖教」は、十一面観音を本尊とする教団で、『観音経』に説かれる現当二世の幸福祈願、大慈大悲利他行を教義としている。教勢は、教会一、支部十、教師二十人、信徒五千人と公称されている。

次に、表末に(附)として掲げた「世界救世教」は本部を熱海、箱根に置く神道系の教団であるが、この教団の以前の本尊は千手千眼観音であり、教団名を「大日本観音会」と称していた。この教団は観音信仰と神道系の「大本」教の影響が強く表われており、純然たる観音信仰を中心とする教団とは異なるが、参考までに掲げておいた。教勢は教会二、教師四千人、信徒九十万人と公称されている。

以上、新教団群も既成教団群と同様に密教系のものが多いことが第一に指摘されるであろう。次に、「真如苑」や「阿含宗観音慈恵会」では観音は単独の本尊ではなく、参考にあげた「世界救世教」にいたっては本尊も教団名称もまったく変更され、これらの教団の観音信仰はまったく流動的といわざるを得ないであろう。唯一、観音を独立本尊とする教団は「観音聖教」のみである。またこれらの教団群は全国レベルから見て中規模および小規模で、いずれも教勢は発展途上段階にあり、すでに安定期に入ったとされる法華系新教団群等と比較してみてもかなりな差異のあることが認められよう。

これらの諸点を総合すると、観音信仰を中心とする教団のうち既成教団の多くは旧来からの庶民信仰に依存した巡礼地信仰の域を脱しておらず、教団としての活動も低迷化していることがうかがわれるのである。

また、新教団群はあらゆる面で発展途上の段階にあり、その観音信仰もいつ他のも

のに変化していくかも知れぬ流動的な要素の強いことが指摘できるであろう。このように見ると、仏教系教団群の中において、いわば観音信仰系教団群ともいべきものの地位は確立されておらず、その展望も実に不確実性に満ちているといわざるを得ないと思われる。

註① この表をまとめるにあたっては、文化庁『宗教年鑑』、仏教タイムス『仏教大年鑑』、雄山閣出版『新宗教研究調査ハンドブック』、金花舎『現代仏教を知る大辞典』、大蔵出版『新宗教の世界』等を主に利用した。

② 大蔵出版『新宗教の世界』I、一九〇頁。

③ 「聖観音宗」の布教活動は、各種の所属団体を設けて多方面におよぼされているが、一方、事業面でも幼稚園、病院、福祉会館等を設立して活動をおこなっており、また「仏教文化講座」をはじめとして各種の講座が開設されている。こうした活動は、ここにとりあげた他の既成教団に見られぬ「聖観音宗」の積極的なカラーをよく示しているといえよう。

華林園と仏教

藤井照之

六朝の貴族知識人の仏教受容を考える場合、宮廷に附属する一庭園である華林園の存在が非常に重要な位置を占めていることがわかる。それは、華林園に於いて行われた仏教が特殊な仏教形態を示すと言うのではなく、華林園そのものが本来的な庭園としての機能を果たしたのみにとどまらず、仏教受容の為の重要な施設となっている点である。特にそれは齊・梁代に於いて顕著に見られる。そこで本稿では、華林園が仏教受容の上で如何なる機能・役割を果たしたかを明らかにしてみたい。

華林園の歴史は古く、魏の洛陽に於いて已に見ることが出来る。『魏志』文帝紀黃初四年の条の裴松之の注に次のように云う。

魏書曰、……是冬、甘露降華林園、臣松之按華林園即今華林園、齊王芳即位、改為華林、

これを見ると、魏の齊王芳が即位したのにもない、齊王芳の諱を避けて華林園を華林園と改称したと云うのである。しかも、華林園は裴松之の南朝宋の時代まで続いていたと云う。但し、同じ『魏志』卷一三王朗伝の中では、已に明帝の時に華林園が存していたことが記されている。この点については多少の疑問もあるが、いずれにし